

## 七不思議の謎にせまる⑥

## 片葉の葦(あし)

江東区深川江戸資料館

現在「本所七不思議」とされる、片葉の葦や置いてけ堀などの事象は、常に「七不思議」として認識、記録されていたわけではありません。本所七不思議の場合、個別の事象としてあったものが、何らかの理由で七不思議とされるようになったと考えられています。

本号では、片葉の葦を例に、七不思議の枠を外し、七不思議を構成する個々の事象に焦点をあててみたいと思います。

## 1 各地の片葉の葦

片葉の葦という事象は、その多くが、葉が茎の片側にしかない葦の由来を説く伝承となっています。七不思議の一つにあげられることが多く、葦以外に薄や笹などの例もあります。民俗学的には、片葉の植物は神霊を乗り移らせる呪具とされています。そして、片葉の植物が生じる場所は、呪具を採取する場所として神聖な土地と考えられ、伝説化したと説明されます。

それでは、片葉の葦の由来がどのように説かれているのか具体的にみていきたいと思います。

## (1) 地域にゆかりの人物の伝承として

①市川市真間——ここに住んでいた手児奈という若い至純な娘のことは、万葉集で既に語り伝えられたことと

して詠まれている。いま亀井院にある真間の井は、手児奈が水汲みにしばしば通った井戸であるというが、このあたりの芦はみな片方に寄っていた。これは手児奈が足しげくここへ水を汲みに来たので、その袖に触れた葉が大きくならなかったとか、あるいは芦の葉が彼女の美しさにひかれてか



片葉の葦の写真  
(日野巖氏『植物怪異伝説新考』)

たってしまったのだ、などと伝えていたが、昭和13年(1938)の大雨による崖崩れで埋没した。(『房総の伝説』／『日本伝説大系』5所収より)

②越後国蒲原郡如宝寺村の片葉の葦は結び葦といい、昔、親鸞上人が後の世のしるしに結んで置いたものといい、「結び置く片葉の葦の後の世に我があとしたふ道しるべにも」という上人の歌をも言い伝えている。(日野巖氏『植物怪異伝説新考』より)

①は、千葉縣市川市真間に伝わる事例です。真間には手児奈という女性の伝承が伝わっており、片葉の葦の由来もその一つです。片葉の葦が生えている場所には亀井院、手児奈霊神堂があり、ともに手児奈との関わりが深い事物です。霊神堂の伝えるところによると、文亀元年(1501)、当山第7世日与上人の夢枕に手児奈が現われ「良縁成就」「孝子受胎」「無事安産」「健児育成」の守護を誓ったとされています。

②は親鸞上人にまつわる伝説の一つです。越後国(新潟県)は、親鸞上人が布教につとめた地であり、親鸞上人の伝説、さらには親鸞上人の七不思議もあります。

①②ともに、それぞれの地域にゆかりの人物の伝説として片葉の由来が説かれており、七不思議とは別の広がり、括られ方のあることが見て取れます。

## (2) 神聖な場所の伝承として

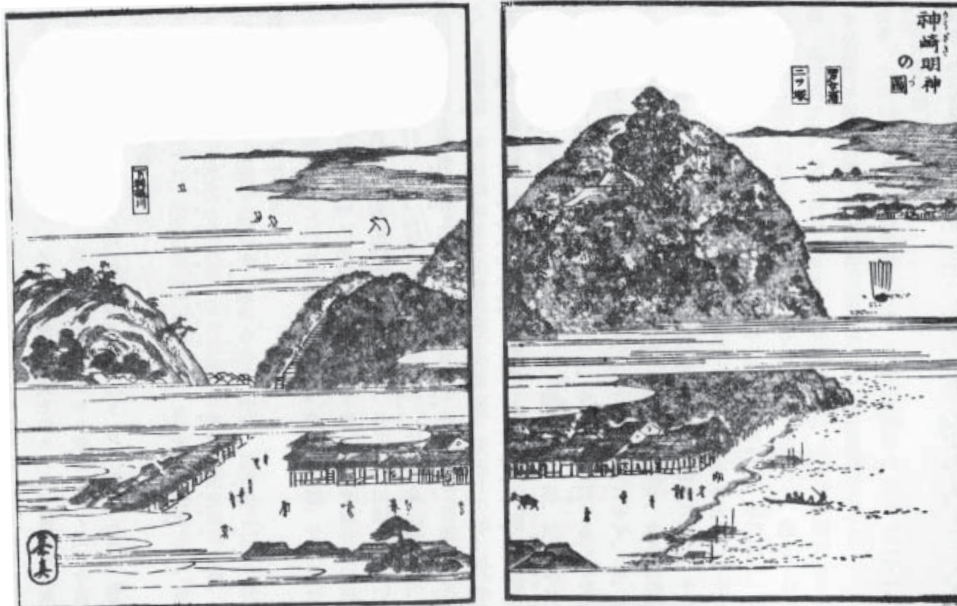
次に、片葉の葦の生えている場所に注目してみたいと思います。

『利根川図志』赤松宗旦著、安政5年(1858)には、神崎明神(千葉県香取郡神崎町)という利根川沿いにある神社の片葉の葦について、次のような記述があります。

## 神崎明神

神崎にあり。利根川へなり出でたる高き山の上なり。むかしはこの山の麓屈曲の所、水逆巻いて船の通路至つてむつかしく、これを神崎の巻と唱へて、船入大いに恐るる所なりと云へり(今に洲いでてこの巻なし)。(略)

この神崎の地はさし出でたる山崎にて、神の社あれば神崎とはいへりとなん。ここより見渡しの中島に、片葉葦・もろはあしとて二くさの葦生ひたり。上つかたなるはもろはにて陽なり。下つかたなるは片葉にて陰なり。その島をふたつじまといひ、その浦を男女の浦といふ。平治元年の社図に、大浦とも真世宇良ともあるは



「神崎明神の図」『利根川図志』（『日本名所風俗図会2関東の巻』）  
神崎の岬を中央に描き、右上には「男女浦」の表記が書き込まれています。

これなり。その島に大神天降まししを、今の地にうつし  
つしまるらせたり。半田の里にても、この神をうつして  
いはひまつりけん。今俗におしまさまといふ社あり。  
そは安婆島のよこなまりにや。この近きわたりなる安  
波大杉明神もかよひてきこゆ。（略）

ここからは、神崎明神の位置する岬周辺の海が難所であ  
ったこと、そして、その岬から見渡せる中島に片葉と諸  
葉の葦が生えており、男女の浦と呼ばれていたこと、そ  
の島に降臨した大神を今の地に祀ったことがわかります。  
片葉の葦の生える中島が神の降臨するような神聖な場所  
として認識されていたこと、また海河守護かいがと関わる神で  
あることが推察されます。

## 2 本所七不思議の片葉の葦

最後に、本所七不思議の片葉の葦について考えてみま  
す。まず、性質の異なる三つの事例を示します。

①菊岡沾涼著『江戸砂子温故名跡誌』6（享保17年、  
1732）

片葉の芦 駒とめの小溝の芦なり。風の吹まはしゆ  
へか、此所のあし片葉也と云。よつて小溝も片葉堀と  
わたくしに云。（\*資料館ノート91・92号もご参照く  
ださい）

②三代歌川国輝画「本所七不思議ノ内 片葉ノ芦」

明治になってから刊行された錦絵です。詞書には、留  
蔵というならず者がお駒という娘に惚れますが相手にさ  
れず、お駒の手足を切り落としその死体を堀に棄ててし  
まい、それ以降この堀に生える葦が片葉になったとい  
話が記されています。（\*資料館ノート92号もご参照く  
ださい）

③『ふるさとお話の旅  
東京／東京 江戸語り  
4』「本所七不思議  
不思議その五 片葉の  
葦」

駒止橋こまどめの堀に生える  
葦はどうしたわけか片側  
にしか葉がつかなかっ  
た。

それは昔、ここでなら  
ず者の男が一人の若い  
娘を刺し殺し、その死  
骸を堀の中に投げこん  
だ、そんなことがあつ  
てからだといふ。片葉の葦  
しか生えないその場所  
は片葉堀と呼ばれるよ  
う

になったが、両国橋をかけかえる時、うめられてしまつて、  
今ではもうない。（布川きみさんの語りより）

①は江戸の名所旧跡を記した地誌です。ここでは、七  
不思議としての記述にはなっていません。片葉の説明とし  
て、風の吹き方を理由にあげています。②は、片葉の由  
来が物語化しており、錦絵という絵画がメディアであるこ  
とも特徴的です。③は、現在に伝わる伝承です。②と同  
じ由来ですが、登場人物の名前は明確にされていません。

それぞれ、時代もメディアも、内容も異なる片葉の葦  
ですが、時代を超えて伝えられていることがわかります。  
江戸・東京という都市の伝承らしく、口伝の伝承だけ  
でなく、文字に記録されたり、絵画の題材になったりし  
ながら、様々なメディアで伝えられてきており、また、物  
語化や絵画化など創作性が強くなっています。

ところで、片葉の葦の生えていたという場所は、両国  
橋の東詰め、駒止橋の架かっていた小さな堀でした。両  
国橋は、武蔵国と下総国に架けられた橋であり、その両  
岸にはひろこうじ広小路が設けられ大変賑わいました。その東詰め  
には大山参りの際に水垢離をとる垢離場みずごりがありました。  
また、①の『江戸砂子温故名跡誌』では、駒止石と同様  
に、駒止橋も八幡太郎義家にまつわる事物かもしれない  
と記しています。

これらは直接片葉の葦の伝承に結びつくものではありませんが、伝承が生まれ育まれた時代に、どのような場所であったのかをみていくことは、新たな伝承の背景が明らかにすることに繋がるかもしれません。その上で、改めて本所七不思議の伝承について考えてみるのも興味深いでしょう。